

【総評】	
浜野	四方を柱に囲まれた、何もない空間。照明も限定されている。 ましてや映像のようなエフェクトも使えない。残されたのは身体のみ。 自分の身体と真摯に向き合い、その声に耳を傾け、身体で考える。 そのなかから新しい世界を生み出そうとしつつある、そんな人たちを選びたいと思いました。
立石	身体というメディアを多義的にとらえた構成が多かったと思います。また音楽の選曲や効果などにセンスを感じる作品も目立ちました。いっぽうで盛り込み過ぎで作品の「芯」が見えにくくなること、構成が途中で腰くだけになることも。内なる声、衝動を汲んだ上で客観的な視点を持つこと、そのあたりのバランスをどう取るかが、今後の作品作りでの課題となる。今回の参加者を見て感じたことです。
住吉	表現とは歴史にまなび、さらにそれを食い破るものであってほしい。既視感のある動きや、個人の内面だけにフォーカスした主題は表現に広がりをもたせないと感じた。規制も多く難度の高い条件だったが、そのなかで身体言語を総動員して、コンテンポラリーの枠組みから跳び出そうとする表現が光っていた。

【最優秀賞】川村美紀子 「むく」	
浜野	あたかも身体の各部位が切り離され、それぞれが勝手に蠢いているかのような動き。 しかも、どのように動こうとも腰の重心は決して揺らがない。ダンサーとしての技量は抜きこんでいる。 静謐さのなかの激情。暗闇のなか地を這うような本人の歌声が響く冒頭から目が離せなかった。
立石	冒頭のアリア(ヴォイスパフォーマンス)から、暗転空間での見えない身体性を感じさせ、引き込まれました。 アヴェ・マリアとAV(アダルトビデオ)の音声が交差するなかでの振りは、まさにダンスによる「カーマストラ」!? そんなイメージをもたらすほかにも、非常に多義性があるひかれる作品でした。
住吉	どこの国のストリートでも勝負できる身体のキレとしなやかさを備えながら、 観る者の情緒を安易に寄り添わせない、孤高の踊り手だ。 アヴェマリアの旋律の、微妙な半音の間隔を深く味わうような四肢のふるえは、 聖と俗のあわいを行き来する精霊を彷彿させた。もっと見たくなる、アディクトしそうなダンスだ。

【奨励賞】鈴木拓朗 「言ったりきたり」	
浜野	総合的な完成度が高い。客席からも笑い声が絶えなかったが、どこまでも滑稽で少し哀しさが滲む。 言葉と身体との関係性。ゆらゆら揺れ動くムーヴメントにも独自の不思議な魅力がある。
立石	演劇的でまたエンターテインメント性も高くオーディエンスを十分楽しませる、いい意味での大道芸的な作品でした。 ディテールが積み重なった動きにもスピード感と高い身体性の裏付けを感じました。 いっぽうダンスからも演芸からも周縁あるような独自の立ち位置にも思えました。 孤高の道を自分を信じて進んでいってもらいたいと思います。
住吉	思わず人を油断させる表情や体型に恵まれた人。 舞台経験の豊富さを感じさせるが、ポジショニングを定めず浮遊してそうな感じが自由。 多彩なネタのつながりはもっと脈絡なく、めちゃくちゃだと、和ませた直後に不安にさせておもしろいかも? 柔軟性を生かしてパレエなんか観てみたい。鉄割、好きですか?

【奨励賞】豊福 彬文 「はやくお家へ帰ったら！」	
浜野	中島みゆき「ひとり上手」が流れる展開にも意表を突かれたが、 その歌声を垂直に断ち切るかのような独特の跳躍が何よりも鮮烈だった。 手の動きをはじめとする身体所作も独自性を感じさせる。
立石	この設定、この選曲のセンス、そしてよく動く身体があるなら、もっと面白くなるはず、と思いました。 振り付けのスタイルに課題が残りますが、大きな可能性を持つクリエイターで、今後に期待したいです。
住吉	次に何がおこるのか、展開の読めない、みょうな体の動きが気になる。 小道具の使い方は洗練はされていないが、楽曲とも相まって、 切なさにも似たもどかしい気持ちにさせる効果をあげた。 台詞があってもよさそう? いまどきのルックスと昭和っぽい武骨な演出のギャップはみずみずしく、期待が高まる。